

まんだら通信

第204号(通巻239号)

平成25年06月 西暦2013年 佛暦2579年 皇紀2673年

安房国八十八ヶ所 第一番札所
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org



日野原先生のお話を聞いて

高橋宏子

先月から上智大学の「グリーンケア講座」を聞きに通っております。先日は日野原重明先生のご講義でした。上智大学グリーンケア研究所名誉所長、聖路加国際メディカルセンター理事長という要職に加えて、現役のお医者さんとして午前中は患者さんの診察にあたり、而も、もうじき百二歳を迎えるという先生はとてはつらつとお元気でした。かれこれ三十年前に、和綴美和子女医先生がお元気だった頃、日野原先生がわ

ざわざ白浜までおいでになり、何人かで血圧測定の勉強をしました。

町役場裏の管理センターで最後のテストが先生の血圧を測ることで、大変緊張しながら先生の血圧を測ったことを、懐かしく思い出しました。

何年ぶりかで、近くで拝見する先生は、夕方六時半から一時間半の講義の間、しっかりと立ちになったまま、ハッキリと遠くまでよく通るお声でお話を続けられました。

先生にはごく普通のことなのでしょう。時には講演で秋田にとんぼ返りで行かれるそうです。

三月には腰の手術を受け、日帰りでも良かったのですが、病院側が心配したので、言いつけ通り二泊まりました。今はもう何でもありません。」と、こともなげにおっしゃるお姿に、ただただビックリし、一緒に行ったお友達と思わず顔を見合わせました。

先生のお話は、人生の最後をどう迎えるか、死をどう乗り越えていくのかというお話を、実例を交え、画像をスクリーンに映しながら、分かりやすくしっかりと説明して下さいました。

人は皆時間の長い短かいはありますが、必ずこの世を去るときがきます。

亡くなり方は自分が選べるものではないとあります。ある方は事故死また病死、災害死、そして、家族、親しかった周りの人達にとっても深い悲しみ、ショックを与えます。

私達はその現実をどう受け止めていったらよいのでしょうか。

うというお話でした。

子供を亡くした親は人生の希望を失う、配偶者を亡くした人は共に生きてゆくべき現在を失う、友人が亡くなると自分の一部を失う、そして親が亡くなると過去を失うといわれているそうです。

徒然草の一節を取り上げてのお話では、「四季の変化は一定の順序がある。けれども死期は順序を持たないでくる。死は前から来るとはかぎらず、いつのまにか背後に迫っている。」

人は皆死があることを知り、しかも急には来ないだろうと思っているうちに突然やってくる。それは沖まで続く干潟がはるかに見渡せても、いつの間にか足もとの磯から潮が満ち始めているようなものである。」

他にも幾つかの例を挙げてのお話でした。そうですね、私達はたくさんの人達に支えていただいで生きています。

この世に生まれたことに感謝しながら、さよならできたらいですね。

そしてまた、たくさんの方を重ねた人達にも、まだまだたくさんの方の出番があります。年を重ねた分、生きる知恵も身につきました。

皆さん良くご存知の柴田トヨさん。今年の一月に、百一歳で亡くなられました。

最後まで、人の心に残る沢山の詩をつくり、周りに元気を下さいましたが、その中のひとつ。

「生きる力」

九十を超えた今 一日一日が とてもいとおしい 頬をなぞるかげ 友達からの電話 訪ねてくれる人たち それぞれ私に 生きる力を 与えてくれる

私も「あの人と知りあえて良かった」と人さまに言われるよう、これからも人生の勉強を続けたいと思っています。

余瀝

▼「世界一小さな奨学金」『あそか基金』を管理して下さいのアンギーお坊様。この程、そのご家族とご縁のご住職が来日して、親善と観光旅行中です。お忙しい日程の中を、去る5日、紫雲寺に立ち寄って下さいました。上の写真のまん中は、84歳のお母さんです。大東亜戦争に敗れて数年後の昭和26年、サンフランシスコ講和会議の席上、スリランカ蔵相のジャヤワルダナさんが「憎悪は憎悪によって消え去るものではなく、ただ慈悲によってのみ癒すことができるのである」というブツ

ダの言葉を引用した演説によって、世界の称賛を得ました。ジャヤワルダナさんは後に初代のスリランカ大統領になりますが、大の親日家として知られ、1996年11月に永眠しましたが、遺言により角膜が臓器提供され、片方をスリランカ人に、片方は日本人に提供されたということです。もともとスリランカの人たちは穏やかで暖かく、人見知りが多いようで、私のようなぼんやり者でも安心して旅ができる、珍しい国です。◆今月の野草はコケリンドウ【リンドウ科リンドウ属】。

名前はリンドウですが、秋に咲くリンドウと異なり草丈は精々6~7センチ、花の大きさは8センチ足らずで、5月から6月にかけて陽当たりのよい芝地などで見かけます。似た野草にフデリンドウがありますが、それより更に小さくて、写すのに苦労する野草の一つです。◆5月21日、24年度の定例総代会を開きました。主な議題は24年度の経常会計決算報告ですが、詳しいことは担当の総代さんにお尋ね下さい。山門修理の相談がありますので、何れ総会があります。2013/6/9 龍渉



第八十八話 弁論大会

今日は、ある女性の話をしましょう。長い話になりそうなので、枕の馬鹿噺はカットしますので、お許しください。

その女性を仮にとし子さんとしましようか。いま、七十代後半のおばあちゃんです。富山県で実際にあった話です。

ある朝のこと、当時、五十代だったとしさんが玄関のガラス戸を開けて、外に出ようとして、驚きました。毛布にくるまれた男の子の赤ちゃんが静かに玄関の前に置かれているではありませんか。しかも、よく見れば、その赤ちゃんは、一年前に生まれたかわいい孫の博志(仮名)ちゃんだったのです。

添えてあった手紙を見ると、同居していた息子の嫁が書いたものです。そこには、「もう、この子を育てる自信が私にはありません。夫と離婚しますので、どうぞ、この子をよろしくお願いします」と書かれてありました。

としさんは、あわてて息子の正博さんに連絡をとりました。すると、息子が言うのです。「あいつが育てるって言うて、昨日の晩、子供を抱いて家を出ていってしまったんだ。俺だって、これまで一生懸命育てたんだ。でも、ダメだ、もう……。」ということは、昨晚、家を出た嫁が、今朝、ここまで戻ってきて、自分の子供を玄関先に置いていったにちがありません。

(まあ、なんとという母親なの。息子も息子だわ)と思いつながら、としさんは息子が嫁の気持ちがいまいわかりました。なぜならこの博志君は生まれつきの発達障害があったからです。もちろん、だからと言って育児放棄はとんでもないことです。

(かわいいそんな博志……おばあちゃんがきつと育ててあげるからね)

その晩、仕事から戻ってきたご主人と相談し、出て行ってしまった息子夫婦の代わりに、孫を自分たちの手で育てる決心をしました。

とにかく「二人でこの子を育てんまいけ」(二人でこの子を育てなければ)と夫婦で約束をして、一生懸命育てました。小中学校は普通の学校、高校からは養護学校に入れました。養護学校に入る時、障害者手帳が必要になりました。その時、博志君に言われた言葉をいまでも、としさんは忘れません。

「おばあちゃん、僕を障害者にしたくないか」

幸い、養護学校の先生が「おばあちゃんはそのは思っていないぞ。ただ、手帳があったほうが博志にとってよかろうと思っただけのことだ。もらっておけ」と言うてくれて、問題は起きなかったそうです。

私になにを書きたかったか、あとは、博志君がある時の弁論大会で話した内容でおわかりになると思います。それは、こんな話でした。

「おばあちゃんに僕のこと好きか、と聞いてみた。好きだと言ってくれた。すごくうれしかった。僕も好きだと言った。言いつらかったが、勇気を出して言ってみた。おばあちゃんはすごく喜んでくれた。」

僕は、じいちゃん、お父さん、お母さんの家族五人で暮らしていたが、僕が生まれてすぐ、両親は離婚して出て行き、じいちゃん、おばあちゃんと僕の三人で暮らすことになった。だから、僕は両親の顔を知らなかった。しかも、僕は未熟児で、先天性の病気があったので、おばあちゃんは言葉の話せない僕を心配して、言語教室に通わせてくれた。

写真がなかったの、お母さんの顔はわからないが、お母さんが迎えに来て抱きしめてくれる夢を何度も見た。でも、顔はわからなかった。

僕は小学校でも中学校でもいじめられた。いじめられるのは、全部、親のせいだと思っていた。誰に話しても相手にされない。先生も同級生も、みんな知らん顔。

そんななかで、おばあちゃんだけは味方だった。あの頃、もし、おばあちゃんがいなかったら、僕は死んでいたいと思う。一度、いつもいじめられているヤツに仕返しをしよう。すると、その親がものすごい剣幕で訴えてきた、おばあちゃんまで呼び出された。先生から「とにかく謝れ」と言われた。すると、おばあちゃんが僕より先に土下座をして謝ってくれた。

いま思えば、あの頃、じいちゃんは認知症で入院していたから、おばあちゃんは大丈夫でいたから、おばあちゃんを守ってくれていたんだ。やがて、じいちゃんは死んだ。じいちゃんの葬式の喪主は僕が務めた。

お父さんが、じいちゃんの葬式に来て、泣いていた。僕は「大丈夫ですか」と声をかけ、その時生まれてはじめて、お父さんと話した。それから、時々、うちに遊びに来るようになった。お父さんからは、いつも寂しい感じがする。何か悩んでいるなら、優しい言葉をかけてあげたい。でも、どう接していいかわからない。

いま、この僕ができること。それは、周りで悩んでいる人がいたら、ただ黙って、相手の話を聞くこと。

その人の気持ちをわからせてください。その人に幸せになってほしいと祈らせていただく。

お母さんが僕を産んでくれなかったら、いま、僕が大切だと思える人に会えなかった。

そう思うと、いつの間にか、家族に感謝したいと思えるようになった。

右翼と左翼のこと

先月号の余滴欄に「右翼っばいといわれました」と書いたところ、珍しく多くの方から反応がありました。全部の方が「そうは思えないけど」ということでしたが、普段何気なく使う言葉ですが、あらためて右翼・左翼って何だろうと、調べてみました。フランス革命の後のフランスの国会で、議長席から見て右側に座った人たちを右翼、左側の席の人たちを左翼といったのが初めだそうです。採決は起立が挙手なので、同じ意見の人が集まっていた方が分かりやすいということのようです。右翼側は保守、つまり伝統や宗教を守り、今までのやり方を基本にする。左翼側の人たちは

革新の進歩主義で、伝統や宗教つまり神の助けによらず、人間の理性で万事うまく行く筈…、ということでしょうか。中世ヨーロッパで教会の力が大きくなり過ぎて、不都合が多くなったことへの反省の意味があったのかも知れません。この「人間優先」の考えはとても良いことに思えます。形として、国よりも人権優先、個人の権利優先になりますね。でも私は、何千年も一系の元首がいて、大東亜戦争に敗けたこと以外は、歴史上異民族に支配されたことがなく、無法に支配したこともないこの国を誇りに思っていますし、思いやり、お互い様などという美德が世界を明るくすることだと思っています。

死んだじいちゃん、いっぱい遊んでくれてありがとう。お父さん、いつもそばにいてくれてありがとう。お父さん、会いに来てくれてありがとう。今度、一緒に飲もうよ。お母さん、産んでくれてありがとう。いま、僕は幸せです。どうしたら、こういう子供が育つのでしょうか。いま、入院中のとしさんは、二十六歳になった博志君の食事のことを、毎日毎日ベッドで心配しています。

